

2026 年 8 月 26 日

学位論文の作成における生成A I の利用について

兵庫県立大学大学院

社会科学部研究科長

学位論文、すなわち、修士論文（特定課題研究報告書を含む。以下、同じ。）及び博士論文の作成におけるガイドラインを以下のように定めます。

1. 生成A I とは、テキスト、画像、音声などのデータを自律的に生成できるA I 技術の総称です。その一種である大規模言語モデルは、自然言語処理に特化し、大量のテキストデータを学習して、人間のように文章を生成する能力を持ちます。それは画期的なことですが、学位論文は作成者の研究成果を示すものですから、作成者自身の言葉で書くものです。したがって、A I が生成した文章をそのまま使用することは禁止します。
2. 生成A I を文章の校正に利用する場合、それが誤字脱字・誤用、スペル、句読点、表記揺れ及び文法のミスの添削であれば、問題ありません。ただし、生成A I が提示した修正案を確認しなければなりません。なぜなら、直接引用では引用する文章を一字一句変えずに採録する、たとえ引用する文章に誤字脱字があっても、そのまま採録する必要があるからです。
3. 生成A I の利用は、剽窃（ひょうせつ）のリスクを伴います。なぜなら、生成A I が既存の著作物のテキストデータを再構成して新しい文章を生成する際に、他人の著作物を無断でコピーする可能性があるからです。たとえ生成A I の利用者が既存の著作物を認識していない場合であっても、生成A I がそれを学習に用いていれば、剽窃に当たる可能性があります。もちろん適切に引用していれば、問題はありません。

4. 生成A Iの利用は、捏造（ねつぞう）のリスクを伴います。なぜなら、生成A Iは学習したテキストデータに基づいて、確率的に最もありそうな単語の連なりを生成しているにすぎないからです。言い換えると、事実に基づいた情報よりも語句を自然につなぐことを優先するため、「もっともらしい嘘」をつく特性があるのです。この現象はハルシネーション（hallucinations：幻覚）と呼ばれるもので、単なるバグではなく、大規模言語モデルの構造的特性です。したがって、生成A Iを利用するときは、事実確認を怠ることはできません。
5. 以上のことを踏まえると、生成A Iを利用するのか否か、また、利用するとして、どのように利用するのかは、慎重に判断する必要があります。したがって、事前に指導教員に相談することを推奨します。
6. 学位論文を受理するに当たり、剽窃チェックツールである「iThenticate 2.0」を用いて、既存の著作物との一致率及びA I生成率を確認します。これらの数値が高いことが直ちに研究不正に当たるとは限りませんが、その原因を可能な限り明らかにすることで、研究不正の防止に努めます。それでも「iThenticate 2.0」もツールである以上、自ずと限界があります。最終的な責任は生成A Iの利用者にあることを忘れないでください。